



TITLE:

新出土醫藥資料における自然品目の探究

AUTHOR(S):

森村, 謙一

CITATION:

森村, 謙一. 新出土醫藥資料における自然品目の探究. 東方學報 1981, 53: 341-385

ISSUE DATE:

1981-03-14

URL:

<https://doi.org/10.14989/66601>

RIGHT:

新出土醫藥資料における自然品目の探究

森 村 謙 一

- 一、はじめに
- 二、テキスト略解と記述方式の説明、
および各論での品目選定について
- 三、各論
 - 菽
 - 葵
 - 穀類
 - 黍
 - 禾
 - 米
 - 桂
- 四、まとめと考察
 - 烏喙
 - 薑
 - 椒
 - 藜蘆
 - 甘草
 - 薤
 - 黃芩
 - 白斂
 - 陵枝
 - 四、まとめと考察

一、はじめに

中國において近年、價值ある歴史遺産が次々と發掘されているが、湖南省長沙の馬王堆三號漢墓から出土し、中國の研究者によって検討され、『五十二病方』と命名・發表された大規模な醫方帛文は、中國の醫藥史をより明らかにするのに役立つだけでなく、關連の深い植物、動物等から自然思想にいたる廣範圍の諸學の歴史研究に極めて有益である。

山田慶兒教授主催の京都大學人文科學研究所・科學史研究班がさきにこの古文獻の検討・解讀を推進され、筆者もその

一端を擔つて貴重な文化遺産の眞價に觸れることが出來た。このたびの機會に、右の『五十二病方』を主な目標として小考を發表し、諸先學の批判を仰ぐこととする。

帛文は品目の組合わせによる處方の羅列であり、植物が品目の過半を占め使用頻度も高い。そこで全體を通じて使用回数の多い品目から順に選び個々に考察する。品目の自然物としての位置付け、各處方での使われ方、本草書に記載されている藥效との比較検討などを試みるが、ややさがけて出土した甘肅省武威縣漢墓からの『武威漢代醫簡』の中でその品目がもし使われていればそちらとも比較検討する。主要品目について右の考察検討を終えてから、品目構成やその使い方を通して『五十二病方』の位置付けを試み、古代本草資料や『武威漢代醫簡』との關係を推察する。

二、テキスト略解と記述方式の説明、および各論での品目選定について

以下の記述でいう『五十二病方』のテキストに相當するのは次の二つである。

I・「馬王堆漢墓出土醫書 釋文 (二)・馬王堆漢墓帛書整理小組・『文物』一九七五年第9期所收

II・「馬王堆漢墓帛書 五十二病方」・馬王堆漢墓帛書整理小組編・文物出版社・北京・一九七九年刊行

一九七三年末に、湖南省長沙市郊外の馬王堆三號漢墓から大量の帛書が出土したのち、その中の醫帛の大部分を占めるままとりとして右のI・がまず發表された。これは、そのままとりの全文を判讀したものを釋文として掲載し、「我國現已發現的最古醫方——帛書『五十二病方』」という詳細な解説一篇を添えたものであったが、年を経て、改めて帛原文について全面的な検討がなされたとみられ、II・が出版された。これは、I・に比べて釋文については二、三の行の増減と字の變更があるが大きなちがいは、病名（病狀）・品目名・處方操作などのうち後世には使われなくなったためなどでや

や難解なものについて、それらが含まれる文のすぐあとに簡要な注釋を各個に付している點である。解説は、Ⅰ・に添えてあったものと同標題のものを、内容的にやはり少し補正を加えて馬繼興・李學勤の兩氏の名前で添えている。^②

人文科學研究所・科學史研究班における検討・解讀はⅠ・についてなされたが、この小論はⅡ・を主なテキストとした。字の判讀は釋文に従い、^④病名（病狀）・品目名・處方操作などの解釋も、原則として付されている簡注および解説に従ったが、語感が通じにくいと思われる場合は譯語を添えるかあるいは譯語に替えた。

『五十二病方』は、五十二の病症を治療するための二百七十餘りの古い處方集であるから、以下の検討でテキスト名を頻繁にくり返す場合には「處方集」と表現することもある。テキストは、原帛での行のならばを守っており、各行に全文におよぶ通し番號をつけているので、その番號を使って處方の各々を指示する。従って、たとえば「第123方」というのは、「第123行から始まる處方」のことであって、「123番目の處方」ではない。

以下の記述でテキストの釋文を引用する場合、

病名（病狀）・品目名と使用部分・使い方（内服、外用の別に一、二の單語を添える）

というふうな極端につづめているが、これは、釋文（したがって帛原文）に缺字や句、文の脱落が非常に多く、全文を引用あるいは譯して記載しても、この小論の目的に直接寄與する効果が期待できないことと、一つの處方内での、品目の組合わせと品目相互の合反關係、處方にもとづく調劑操作などは、この小論の主な目的ではないからである。

各論における検討品目の選定について

これは、何よりも『五十二病方』全體のなかで處方に組み入れて使用されている回数多さを優先的に考慮した。一つ一つの處方は、品目の組合わせおよび品目總數がさまざまに異なるから、或る一種の品目が、關與するどの處方において

も全く同じだけの比重を持ち、同じだけの薬效を期待されているとは限らない。まして、處方の對象となる病氣（病狀）の方もさまざまであるから、期待される薬效は同じ品目については基本的には同じでも、處方の各々でニュアンスはかなり異なる場合が多い。従って、一種の品目が多くの處方で具體的に參與している姿を廣く通覽することにより、處方集においてその品目に期待されている薬效の眞の姿が誤りなく判定出來ると考えたからである。

右の見解から、『五十二病方』において少くとも四、五回以上使われている植物品目をもれなく回数が多い順に挙げ、検討していったのが次の各論である。穀類については、後述のように類の中での特殊な關連があるので、全體として一つの品目のようにまとめている。使われている回数が少なく二、三回以下の品目でも、この小論に有意義なかわりを持つと判断したものは各論の記述あるいは全體考察の注などで採り擧げてある。

注

(1) 行の増減としては、I. の119行を削除し、148・149・234・460の四行が新たにII. で挿入されている。従って、I. とII. の行番には左のよう
なずれが生じている。

I. での行番 II. での行番

1 から 118 まで。……上に同じ。

120 から 148 まで。……上の行番から1を減ずる。

149 から 232 まで。……上の行番に1を加える。

233 から 457 まで。……上の行番に2を加える。

458 から 459 まで。……上の行番に3を加える。

字の變更は、多くはないがI. に比べてII. は原帛の字の判讀に、より正確を期した様子が見える。326行からの「肝療」(I. では療字を讀としていた)のように、病名が改められる結果となったものもある。

全體に、I. での缺字部分の判讀に成功して、特定の字を充てた場

合がかなりある。

(2) II. には『五十二病方』とその解説の他に、醫帛の残りの部分の四つのまとまり(足臂十一脈灸經・陰陽十一脈灸經甲本・脈法・陰陽脈死候)を、いずれも釋文に簡注を添えて掲載している。さらに、それらの四文についての解説二篇(「馬王堆帛書四種古醫學佚書簡介」および「從三種古經脈文獻看經絡學說的形成和發展」)を付している。

(3) II. が出版されるより前であった爲。

(4) 原帛は、寫眞による一部分が示されている外は、發表されていない。

(5) 行の番號は、I. では各行の頭に算用數字で付けているが、II. では各行の末尾に漢數字(一、二、三……)で付けている。また、I. は原帛での行のならばを嚴密にそのまま釋文に移しているようであるが、II. では、一つの處方としてのまとまりを重視したのであろう、一つの處方を形成する各行は、原帛での行の變り目に右の行番數字をはさむ形で續けている。

三、各 論

菽 (大豆)

處方中に最も頻繁に使われている品目の一つである。同じ馬王堆の、一號漢墓から出土した豆類種子の大部分は、今日のダイズと同じ種と同定されている。^①ダイズ *Glycine max* MERRILL は恐らく殷の時代の中國で、野生のツルマメ (中國名・稽豆) から出て栽培化され、華北の夏の氣候とアルカリ性土壤に適合して古代の最も重要な作物の一つとなった。^②

「菽」の字は、『詩經』・「小雅・采菽」に見られる例を始めとして、古文獻に出て來る場合は、實用に供する大粒の豆類を總稱していたとされるが、古代の華北では、ダイズに匹敵するほどの普遍性を持った他種類の豆は無かったから、事實上、「菽」はダイズであつた。^③そしてこの植物は、いくぶん異なる氣候の地でも良く適應して、それぞれの地に合った品種が容易に形成されるから、長沙などの華中にも早くから廣まったことは疑いない。ダイズよりずっと小粒の豆なら、古代にも實用品があつたが、それには「荅」という別字が古くから定まり、この處方集にもわずか二例であるが「荅」品目として使われている。しかも、さきの一號漢墓から出土した豆類種子の中に、小粒のものが少しあつて、今日のアズキ *Phaseolus angularis* Wight. と同じ種と同定されている。^④それが「荅」である。要するに、處方で用いられている「菽」は、ダイズと限定してよい。

この品目は十二通りの處方で使われており、その各々の場合を、治療目標の病氣あるいは症狀・品目の使用部分・内服、外用の別、の順に端的に略記して並べてみると

第74方 烏喙（トリカブト類・猛毒草本）の解毒・種子（すなわち豆、以下「豆」と記する）・内服（煮汁）。

第85方 蛭がとりついて起った炎症・豆・外用。

第109方 疣取り・莖・外用（こする）。

第161方 泌尿系疾患・黒菽の豆・内服（煮汁）

第187方 女子泌尿系疾患・藿（ダイズの葉）・内服（蒸した汁）。

第242方 痔瘻・菽醬（鹽づけのダイズ）・外用（膏藥）。

第286方 疽（體內化膿性疾患）・大菽の豆・内服（煮汁）。

第326方 肝癰（腔やその附近の火傷）・豆・外用（塗藥）

第341方 疥癬（寄生蟲による皮膚病）・豆・外用（塗藥）。

第451、452、454の各方 癰（悪性のできもの）・豆・外用（塗藥）。

釋文の菽の前に形容詞がついている例が二つほどあるが、第161方の「黒菽」については、ダイズの原種のツルマメ（前出）が黒色の豆であるところから、ダイズも豆の皮（種皮）が黒い品種がよく出て、それが象徴的な意味で好まれて來たのは周知のとおりである。また、第286方の「大菽」は、疽病が血疽、氣疽など、急速に悪化して命取りとなる重大な病氣であるから、その際に用いるダイズは特に大粒の上質のものにすることが望ましい、という意味ではないか。

以上、『五十二病方』での「菽」を通覽して、他の資料と比較してみる。

まず、從來の本草資料の中の、古代の記載に見える「大豆」の藥效と、右の菽の藥效とがよく合うことが分る。すなわち、『證類本草』に收められている「本經文」の大豆の「主治」は、「癰腫に塗る。煮汁を飲めば鬼毒を殺し痛を止める。」とあり、右の『五十二病方』での菽の使用對象を短文にまとめたような表現になっている。同じく『證類本草』に收まる

「別録文」は、大豆についてはやや盛り澤山だが、その中に「烏頭（烏喙）の毒を殺す」とか、「腫を去る」などの、右の菽の具體的效用に一致する藥效が見出される。つまり、兩者は同一品目であることは自明といえる。ところが、品目の名稱が異なるのである。『五十二病方』には、「大豆」はもちろん、およそ「豆」字の品目名は全く無く、一方、古い本草記載には「菽」という名稱は無いのである。^⑩

また一方、『武威醫簡』には、「菽」も「大豆」も、ともに全く登場しない。豆類の品目としては、巴豆（ハズ）、赤豆（アズキ）、皂莢（サイカチ）、それに加工品の豉（コウジ）^⑪などが二例か一例ずつ、散見されるだけである。巴豆は、インド原産の樹に實るもので、豆（種子）自體はダイズに似るが、藥效が全く異なるから、兩者を混同することは有り得ない。赤豆は色が特異であり、皂莢は豆の形、藥效がダイズとは全く異なる。^⑫豉だけが、ダイズの可能性を残しているが、加工物であり、この『武威醫簡』での使用例は、金創（刃物による傷）で腸が出たのを治療する處方であるから、『五十二病方』でのダイズの使用例とは全く異なる。いわゆる「生大豆」^⑬は、ここでは藥物として全く使用されていない。『武威醫簡』は、『五十二病方』にくらべて小規模であつて、對象病數・處方數ともに三分の一程度であるから、『武威醫簡』に編入された處方には、たまたまダイズを必要とする例が無かつたということも考えられるが、『五十二病方』で最も頻繁に使われている品目が、こちらでは全く使われないのは、少しく奇異である。

葵（冬葵）

やはり頻繁に使われている。「葵」は今日フユアオイ *Malva verticillata* L. に當てられているが、これは中國原産の育ちやすい丈夫な植物で、冬も葉が枯れないところから「冬葵」の名稱も古くから通用している。藥物として使われるだけでなく、若い葉などは食用になるのでヒトとのつながりは深く、『詩經』その他の古文に見える「葵」、「冬葵」、「葵菜」

などは、すべてこの植物とされている。馬王堆一號漢墓から出土した蔬菜類の中に種子があり、右の學名のこの植物であると同定されているから、『五十二病方』で使われている「葵」も、同じものであろう。使われている處方例を略記してゆくと

第109方 疣^{いぼ}取り・葵の莖・外用（こする）。

第153方 泌尿系疾患・古い種子・外用、内服不明。¹⁷⁾

第168方 泌尿系疾患・種子・外用、内服不明。

第170、171、173の各方 泌尿系疾患・種子・内服（いずれも煮汁）。

第192方 尿異常（膏のような尿¹⁸⁾）・古い種子・内服（煮汁）。

第355方 疥癬・古い莖・外用（膏藥）。

第406方 身中の惡蟲・古い種子・外用、内服不明。¹⁹⁾

第420方 潰瘍のたぐい・種子・外用（塗藥）。

第153、192、355、406の各場合は、釋文ではいずれも葵字の前に「陳」字があつて、陳葵種、陳葵莖、陳葵、といった語になっている。『證類本草』に收められている梁・陶弘景の文に、「秋季に葵を種え、圍いをして冬を越せば春になって子が成る。これを冬葵という。藥用としては性が至って滑利するものだ。春葵子も滑するが藥用には堪えない。（以下略）」とあるから、少くとも葵の場合は古い方が藥效が確かであると見なされていた。したがって『五十二病方』の場合も、「陳葵」という別種の植物でなく、「葵」で該當使用部分の古いものと解釋してよいと思われる。²¹⁾

次に、右の『五十二病方』での葵の使用例と、本草書の古代の記載に見える葵との、藥效を比較してみる。

『證類本草』の冬葵子（種子）の「主治」を見ると、「本經文」が「五臟、六腑の寒熱、羸瘦。五癰に小便を利す。久

しく服すれば、骨を堅くし、肌肉を長じ、身體を軽くし、天年を延べる。」とある。この文で最も具體的な藥效を述べているのは、「五癰に小便を利す」の部分であるが、「五癰」は『黃帝內經・素問』・「宣明五氣篇」に「膀胱不利爲癰、（以下略）」とあるように、泌尿系疾患の五つの場合であり、馬繼興・李學勤兩氏が「我國現已發現的最古醫方——帛書《五十二病方》」で指摘しているとおり、『武威醫簡』の第10簡に説明する、石癰・血癰・膏癰・泔癰の四つを含む²²。したがって、右の葵の使用例・第153、168、170、171、173、192の各々は、すべて「本經文」に合致するのである。また、『證類本草』・「別錄文」は、冬葵根について、「惡瘡。淋を療じ、小便を利す。（以下略）」という「主治」を載せており、「淋」は、やや時代が下ったところに「癰」と同じような泌尿系疾患を指す語とされているから、葵の場合、種子だけでなく、根や莖などの他部分も種子とはば同様の藥效を有するものと考えられ、癰に對して使用する場合に限らず、右の使用例全體としても、本草書の古い記載によく合うということが出来る。

ところが『武威醫簡』には、この「葵」がこれまた全く使われていない。殊に、前述の、癰を治療する處方にも見當らないのは不思議である。癰以外の病氣に對する處方にも無く、別名稱でこの植物が使われているのではないかという探索も、目下のところ無駄に終っている。菽の場合と同様の、この奇妙な對比については、のちのまとめで考察する。

穀類（黍、禾、米、その他）

中國の穀物の歴史は、まことに古くかつ多種多様なので、個々の種類の植物學的な同定については、いまだに研究者により意見が大きく分れるものもある。しかし、今回のこの小考の主な對象である『五十二病方』の中に、穀類がいろいろな名稱で少しずつ登場し、全體ではかなりの頻度で使われているから、あえて採り擧げ、整理を試みた。

黍

穀類のうちで、單一の名稱では最も多く使われている。馬王堆一號漢墓から、陶器やうるし塗りの容器に納まって比較的多量が出土し、今日のキビ *Panicum miliaceum* L. であると同定されている。²⁵『五十二病方』の「黍」も、この種と限定してよからう。

東アジアが栽培の起原地という考えが有力になりつつある²⁶この作物は、中國では、とうぜん古代から廣く栽培され、親しまれた。長沙の地あたりでも、主な穀物の一つであったことは疑いを入れない。

處方に使用されている例を、菽や葵の場合と同じく略記すると

第85方 蛭^{ひる}にとりつかれた炎症・種子（すなわち穀粒）・恐らく外用。

第189方 泌尿系疾患・穀粒・内服（煮汁）。

第240方 痔瘻・莖^き内の髓^{ずい}・外用（膏藥）。

第241方 痔瘻・穀粒²⁷・外用（膏藥）。

第326方 疔^{やい}腫の病（膝より下の火傷）・古い穀粒・外用（膏藥）。



第428方 凍傷・穀粒のとき汁・外用（塗藥）。

以上である。黍の藥效についての古代の本草記載は、『證類本草』では、黍米（精白粒）の「主治」として、「氣を益し、中を補す。」という「別錄文」があるだけで、これでは具體的でない。もっとも、「丹黍米」という特定品種には「別錄文」で他の「主治」があつて、「欬逆上氣、霍亂。洩利を止め、熱を除き、煩渴を止める。」といっているが、右の『五十二病方』で要求されている藥效とは、充分な合致は見出せない。また、黍の、穀粒以外の部分についての、古い記載はない。黍は、キビのうちでは、粘性の強いモチキビであり、また、右の黍の使用例は、特定の品種を指定しているのではな

く、さらに、第189方以外の各處方は、穀粒あるいは莖の髓などをいずれもつぶして他の藥物と混ぜ合わせて膏狀にして患處に塗布するか、痔瘻なら可塑性のある塊にして患部に押しあてるのであるから、黍には、直接の藥效ではなく、患處に安定させる爲の粘着劑あるいは可塑劑としての、機械的な役割を期待しているとも考えられる。

そしてこの黍は、『武威醫簡』には、やはり一例をも見出せないのである。

禾

殷墟の卜辭のの字がよく實った穀物の姿をあらわし、しかもアワ *Setaria italica* (L.) Beauv. が穂を垂れた形に最もよく似るところから、の字は中國のすべての穀物の字のもとになるとともに、アワをも意味するようになったという。²⁹そして、アワは、野生のエノコログサ（中國名・狗尾草³⁰）から出て栽培化された、中國最古の穀物であるという³¹のも定説である。

處方に使われている例としては


第114方 癲癩³²の治療・禾³³のわらたば・内服。

他の名稱だが明らかにアワである場合も並べると

第85方 蛭³⁴にとりつかれた炎症・秫米（精白したモチアワ）・恐らく外用。³⁵

第92方 マムシにかまれた中毒を治す・青梁米（オオアワの一品種）・内服（煮汁）。

第189方 泌尿系疾患・稷（アワの古稱）・内服（煮汁）。

なお、こうした品目の別稱關係などについても、本草資料は時代が新しすぎて参考になりにくいので、より古く遡れる関連知識體系・例えば栽培植物起原研究とか、古代・原始農業史などに頼らざるを得ない。右のにしても、本草

(したがって本草に關連の深い後世の醫方)で使はれるときは必ずウルキビなのであるが、『五十二病方』が成立したとされている古い時代では、アワなのである。³⁵⁾ 以上で、アワがこの時代にすでに、別々の名稱がつくほどに異なる特徴をもつ數品種に分れ、それぞれ通用していたことが分る。栽培植物になってからの年代の長さと、變異が生じやすかつ淘汰を受けやすい遺傳的素質との相乘結果である。³⁶⁾ 通用し續けた各品種は、年代のずれはあつてもたいい本草に收録されていったと思われるから、これまでに検討した品目の場合のように比較してみることが出来る。『證類本草』に入っているアワの各品種のうち、粟と青梁米の「別錄文」には、「小便を利する。」とあるから、これは右の第188方の使われ方と合うが、品目名はやはり食いちがつている。一號漢墓からは、アワは少量だが確かに出土している。³⁷⁾ 『武威醫簡』には、どの名稱でも見出せない。

米

長沙の地は氣候、土質、灌漑の便などの諸點で稻作に向いているから、『五十二病方』の當時でも、とうぜん米は穀物の中でも最重要のものとして生産されただろう。

馬王堆一號漢墓から、かなり多量に出土し、しかも護穎(もみがら)が大部分のものについていたという。そこで、『一號漢墓動植物研究』(註1)では、かなり詳細な検討結果を發表している。籼型(イネ *Oryza sativa* L. の中の var. *indica*、普通、我々がインディカと呼んでいる系統と思われる)と粳型(同じく var. *japonica*、我々がヤポニカと呼んでいる系統と思われる)の二型に分け、さらにいくつかのタイプに分類して、現今に彼地湖南省、あるいは近隣の省で栽培されている品種と比較している。そのころにもう品種が豊富であつたことが分る。

『五十二病方』の處方に使われている場合を略記してゆくと

第181方 泌尿系疾患・米・内服（煮汁）。

第270方 痔漏・米・内服（煮汁）。

第307、309方 火傷・蘘米（米もやし）・外用（膏藥）。

第353方 疥癬・□：□米・外用（塗藥）。

第388方 漆かぶれを治す・米・恐らく外用。

右の使用例を、本草書の中の米（品目としては稻米⁴⁰）の藥效と比較してみると

「別錄文」の「主治」・「飯にすれば中を溫め、熱多くし、大便を堅からしめる。」

少しも合わない。本草では「稻米」は、モチイネを含めたイネ一般を指すから、ウルチイネだけを意味する別品目の「粳米」の方で「別錄文」の「主治」をみると「氣を益し、煩を止め、渴を止め、洩を止める。」とある。「洩」は廣義の泌尿系疾患に該當するから、第181方にだけは何とか合うが、他の方にはやはり合わない。稻米・粳米どちらもいわゆる別錄品で、「本經文」は無いのである。

米穀に關する二、三の品目の場合を次に添える。

第424方 皮膚病・飯・外用（塗藥）

第178方 泌尿系疾患・古い藁・外用（薰蒸）

第428方 凍傷・數年の古い藁・外用（灰を塗布）

第304方 疽（體内化膿性疾患）・麥・内服・（煮汁）

第94方 マムシにかまれた中毒・五穀・内服（煮汁）

第361方 疥癬・穀・内服（煮汁）

こうしてみると、米や米穀の使用対象は、化膿性、體表性の病氣か傷害、あるいは泌尿系疾患 とうふうくに、きわめて具體的な、限られた異常である。ところが本草資料にはそれに合う藥效記載がない。

以上の米（コメおよび原植物のイネ）が、『武威醫簡』で使われているかどうかをみると

第8簡・鷹聲□□言を治療する處方 において

朮、その他七種（藥名略）計八種の品目を粉にして混ぜ合わせたものを、方寸七（藥さじ）一杯を食事の後で米、麻（粥）で飲む。

というのと、もう一例

第70簡（實は第57簡・千金（の病い）を治療する膏藥方 が長大な記載の處方で、第71簡までは延々と續いている、その途中）において

……亭磨二分、（中略）それぞれくだいて混合したものを、一刀圭（刀の形の藥さじ）分、米汁（米のとぎ汁）で飲み、……

がある。兩方とも、粉藥を飲むための嚥下劑である。水ではなくて、そういう液體を指定しているのだから、何か藥理が關係しているかも知れないが、少なくとも、『五十二病方』の場合のような、主劑に近い使われ方ではない。

桂（箇桂もあわせる）

この品目の本物は桂樹（本草書での名稱は牡桂）Cinnamomum Cassia Bl. の樹皮を乾かしたものである。日本には産しないが、牧野富太郎氏はホンニツケイと呼んだ。この本物の種でなくとも、Cinnamomum クスノキ屬の他の種の中には、成分は劣るが何とか通用するものが何種かある。日本などで栽培している肉桂 Cinnamomum loureirii NEES もその

一つである。中國でも、本物の *Cassia* 種は、廣東・廣西兩地方にしか生育しないらしい。^④ 湖南省長沙なら、兩地方とは大巾にはへだたっていないし、馬王堆副葬品の豪華さから考えると、高價な本物の桂皮を使っていたかと想像するが、馬王堆一號漢墓から出土した桂皮現物は、『一號漢墓動植物研究』二九頁～三十二頁、によると浙樟 *Cinnamomum chekiangense* Nakai という珍らしい種である。薄斷面を顯微鏡で調べ、そのカラー寫眞も添えて嚴密に鑑定している。これは『海藥本草』などに記載のある天竺桂 *C. pedunculatum* NEES. に近い型だとも述べている。つまり沿海性品種からの製品である。

箇桂は、從來、藥用の牡桂とは成分が異なる別種で、香氣が強く香料として用いられる *Cinnamomum zeylanicum* NEES セイロンニツケイのことであるとされていたが、近年、そうではなく、牡桂と同じ材料で、調製する仕方が少しちがうものであるという説も出た。^④

處方における使用例を、略記してゆくと、

- 第1方 ^{もちもち} 諸の傷・樹皮（特別に斷り書がない限り必ず樹皮）・内服（煮汁）。
- 第67方 巢者（の病）（體臭異常の一種）・樹皮・外用（熏蒸、煙を吹わせるらしい）。
- 第233方 積の病（陰囊腫）、樹皮・外用、内服不明（原文缺字のため）。
- 第249方 内痔・樹皮・熏蒸（患處をいぶす）。
- 第259方 内痔・樹皮・内服（煮汁）。
- 第276方 疽病（體內化膿性疾患）・樹皮・内服（酒浸）。
- 第299、301の各方 疽病（體內化膿性疾患）・樹皮・（恐らく）内服（煮汁、上の「恐らく」は原文缺字のため）。
- 第350方 疥癬・樹皮・外用（膏藥）。

第407方 匿齒（蟲齒）・樹皮・外用（塗藥）。

第441方 蟲の病（下腹部に惡蟲が入り込んだもの）・樹皮・外用（臭氣消し）。

以上は桂皮の使用例であるが、次に箇桂皮の使用例も並べておく。

第227方 積（陰囊腫）・樹皮・外用（膏藥）。

第372方 癰（惡性のできもの）・樹皮・外用（膏藥）。

次に、本草書の古代の記載における藥效との比較であるが、右に列擧した桂皮（および箇桂皮）が使われる病氣は、第1方の場合を除いてあとはすべて、「悪いもの、蟲」あるいは「悪いところ、化膿しているところ」が「内側」にあるのが共通特徴である。それらを退治する、治療する爲の藥を「内側」まで案内する役割の品目が要求される。それが桂（箇桂）皮なのである。『證類本草』の桂の「別錄文」は、「……百藥を宣導して畏るる所無し。……」と明言し、同じく箇桂の「本經文」は、「……諸藥の先聘通使と爲る。」と明記している。處方は、本草古記載の示す抽象的な藥效を、良く具現しているのである。

桂は、『武威醫簡』にも頻出する。

『五十二病方』中の處方での使われ方を表示したのと同じ略記方式で、用例を並べてみよう。幸い、こちらのテキストにも各木簡に番號をつけている。（ただし、米の検討で出たように、各處方が長く、一處方で數木簡にわたるのがむしろ普通である。）

第3簡 久欬上氣喉中百蟲鳴るが如き狀態・桂皮・内服（丸にする）。

第8簡 瀉のような聲で□□□□言う狀態・桂皮・内服（粉末）。

第10簡 諸の瘰（泌尿系疾患）・桂皮長さ半分・内服（粉末）。

第11簡 瘀（体内の積血）・桂皮長さ二分・内服（粉末）。

第31簡 兩手が頭に擧らず横にもなれない状態・桂皮・使われ方不明（缺文のため）。

第44簡 心腹大積し上下すること蟲の如く大いに痛む状態・桂皮一寸・内服（粉末）。

第46簡 伏梁（心が積する病）で胃腸の外に膿がある状態・桂皮一尺・不明（缺文のため）。

第80簡⁴⁶ 長く欬嗽を患い（慢性氣管支症状）、氣が逆上し煩悶して死にそうな状態・桂皮一尺・内服（煮汁）。

第82簡 激しい下痢が長く續き膿血を下し………醫者も手の下しようがなく引きあげる状態・桂皮一分・内服（丸にする）。

第82乙簡（82甲の處方の續き）………起きあがれないで□□□□腸の中が痛む状態で出血が多い場合・桂二分（追加・内服（丸にする））。

以上であるが、通覽するとやはり『五十二病方』の場合と同じく、「内部疾患」ばかりである。しかも慢性で激しい症状の場合が多い。身體の中に居座ってしまった感じの病氣に對し、藥を行き届かせる桂皮の役割が期待されているのである。『五十二病方』の場合のように、異常な魔物、惡物が身體の特定部分へ入り込んで、その人を振り回しているという感じの症状はないが、それはやはり同じ漢代でも時代が下って來て、病氣のとらえ方が合理的になっていることを示すのではないか。『武威醫簡』には、邊境で軍事色の強い土地柄を反映してか金創（刃物傷）に對する處方が多いが、それは桂皮は全く使用されない。金創の場合は、「内」に悪いところは全くないからである。

烏喙

かなり頻繁に使われている品目であるが、本草書に出ている「烏頭」、すなわちキンポウゲ科・*Aconitum* トリカブト屬

の植物の塊根とみられる。⁽⁴⁸⁾ 直接には、『證類本草』に引く「本經文」に、「烏頭・・・一名烏喙」とあり、「別錄文」では「烏喙」は「烏頭」と別文章になつてはいるが、「烏喙」についての主治（主な效用）記載が、「本經文」の「烏頭」についての主治記載とよく合うことなどによるが、「烏頭」は、古來有名な猛毒物で、中國だけでなく他民族でも、絞り汁を銹につけて人や獸を射殺すのに用いられた。⁽⁴⁹⁾ それに符合するように、この『五十二病方』では、病名の一つとして「烏喙の毒」を挙げ、この毒を被った場合の解毒處方を五通りも示し、その内には後世、烏頭の毒を解する定法となつた、ダイズの煮汁を内服する處方（「菽」の項目で引用）も含まれている。名稱と效用の両面で、他にまぎらわしい品目もなく、さらに、この處方集とあまり時代が異ならない他分野の古典でも、「烏喙」は著しい毒物であるとしているから、これは「烏頭」にちがいない。

ところが、原植物の、トリカブト屬の内で種類が多く、中國の各地方で、どの時代にもどの種を主に使っていたかは、詳しくは判らない。最近の中國における研究成果を盛り込んだ新版の『中藥志』・第一冊では、烏頭の原植物として *Aconitum carmichaeli* Debx.（現中國名も「烏頭」）を定め、邊境を除く大部分の地で、この種が主要品となっているといひ、東北地域では、「北烏頭」*A. kusnezoffii* Reichb. という別種を使うといっているが、さらに、特定邊境あるいは特定地方で使用される別の六種も挙げている。⁽⁵⁰⁾ 「烏頭」と「北烏頭」の兩種については、毒作用のもととなる主要含有アルカロイドの、ペーパクロマトグラフィによる分析比較結果も示しているが、それは兩種について殆んど等しい。そこから類推して、古代においても、この猛毒の品目としては、右の *A. carmichaeli* 種を含め、效果に多少の強弱はあっても同じように使えるトリカブト屬の何種かを混用していたと考えられる。従つて、「烏喙」は、そのトリカブト屬の中の分類上の特定の種類を指定しているのではなく、この品目の塊根の、具體的な形狀を指定したのであらう。この塊根は、普通、下端が尖つて細い圓錐狀となるが、たまたま下端が分岐して、喙（くちばし）のようになつたものがあれば、この品目の

藥效に、よりふさわしい形状とみなされたのではなからうか。品目の具體的な形状などについての、このようなイメージの持ち方は、本草の古い品目については珍らしいことではなく、例えば「人參」・オタネニンジン *Panax Ginseng* C. A. Meyer の場合も、普通は一本にまとまる塊根が、たまたま分岐してヒトの肢體に似た形状になっているものがあれば、ひとときわ靈妙な效力を持つように説かれたのである。⁴⁴しかし、「人參」の場合は、藥效が、不老長生に貢獻するといった、いくらか神祕的なものであり、塊根の出來方も、深山幽邃の地の木蔭で長年月を経て成長するので、そのような靈的な見方がよく似合うのに對し、「烏喙」は品目の性格特徴が全く逆で、激しく具體的な藥效のものであるから、偶然的な形状に價值を置いて無意味であることが、早い時代に悟られ、「烏喙」という名稱が廢れていったのではなからうか。赤堀昭氏によれば、「烏喙」の名稱は、六朝以降、醫處方においてほとんどみられない。⁴⁵この事實も、右の推定と矛盾するものではない。『證類本草』に引く『吳普本草』の文に、「烏喙、神農・雷公・桐君・黃帝・毒有り（とする）。……形は烏の頭の如く、兩岐有りて相合い、烏の喙の如きを名付けて烏喙というなり。畏、惡、使する所はことごとく烏頭と同じ。」とあるが、五世紀後半とされるこの書のころが、形状に意味を持たせた古めかしい見方から、實效・作用に關心を集中するようになった、いわば醒めた見方へ、品目把握の流れが轉向した時點であろう。『神農本草經集注』において陶弘景が各品目に新註を施したのも、右の『吳普本草』が著わされた時期に近いと思われるが、（註20參照）、陶弘景もその新註で、この品目については「……腦形、烏鳥の頭に似る有り。故にこれを烏頭と謂う。兩岐有りて共に蒂狀、牛角の如きは烏喙と名づく。喙はすなわち烏の口なり。」と述べており、「烏喙」は、「烏頭」のうちの、そのような形態的な特徴をもつものであることを言い表わしている。

なお、烏頭のうち、特に長大なものには「天雄」、年を経た塊根のそばに新しく分蘖した塊根には「附子」あるいは「側子」と、さらに別々の名稱がある。⁴⁶これらの別稱も、かなり早い時代に現われたようである（註51參照）が、こうした

別稱の成因は、かなり古く長大化した塊根、それほど古くないが年を経たもの、新しく生じたもの、それぞれに植物部分としての経歴が異なっているため、アルカロイドの含有状態も差が有り、それが一つ誤れば命にかかわるほど激烈な作用を及ぼすだけに、修治（薬に仕上げる加工操作）を具體的にそれぞれに應じて變えなければならぬことにある。ところが、『五十二病方』では、これらの別稱も、烏頭の名稱と同様に全く出て来ない。すなわち、烏喙だけで終始している。この著しい特徴も、少くともこの植物については、生薬としての把握が初步的段階に止まっていたことを意味するのではないか。

次に、この品目が使われている處方を端的に略記してゆく。使用部分はすべて塊根である。

第16方 金傷（刃物傷）・（恐らく）外用（塗藥）

第67方 巢者（の病）（體臭の異常）・外用（熏蒸）

第259方 牝痔（内痔）・内服（煮汁）

第280方 疽病（體內化膿性疾患）・恐らく外用（塗藥）⁶⁰

第347、350、353、354の各方 痂（疥癬）・外用（膏藥または塗藥）

第366方 癰（惡性のできもの）・外用（熨し藥）

第413方 瘡病（乾疥、すなわち皮癬）・外用（膏藥）

以上である。通覽すればただちに明瞭な傾向が判る。すなわち、この品目の適應症は、まず第一に皮膚表層の異常、殊に淺部に散らばるべきもの（疥癬、皮癬）であるが、表層のものだけに止まらず、より内側の大きなできもの、類（癰、牝痔）から、身體内部の廣範圍な化膿や異常（疽症、巢者）にいたるまで、強力な作用が充分及ぶと考えられていたのである。

そこで次に、本草書の古い記載での、この品目の薬效と比較してみる。

既に述べたように、「本經文」は、烏喙を烏頭の別名として擧げているだけで、烏喙について主治その他の記載は無い。烏頭の主治（註49に引用）にも、右の使用例に合う記載は無い。しかし、附子の主治に「・・・金瘡（を主とする）。癰⁶¹の堅きを破る。・・・」とあり、天雄の主治にも「・・・金瘡（を主とし、）・・・」とあるから、全くつながらないことはない。一方、「別錄文」は、烏喙の主治に「・・・癰腫膿結（を主とする）。」とあって、右の『五十二病方』での使用例のうち、第280方・第366方などには合うようである。また、烏頭の別稱・側子の「別錄文」の主治にも、「癰腫」が擧げられている。ちなみに、この「側子」は、註58で典據を補ったように、別錄品である。そして、「別錄文」の天雄・烏頭・附子の各記載には、右の使用例のどれかに合う主治項目は、やはり見出し難い⁶²。要するに、この品目の、『五十二病方』における使い方と、本草書の古記載とは、「別錄」系統独自の記載文には合うところがあるが、全體的には關連は深くない。名稱が、かたや「烏喙」一本やりであるのに對し、他方は「烏頭」・「天雄」・「附子」・「側子」と多元的になっているだけでなく、藥效・作用の理解と適應症の指定が明らかに違い違っているのであって、『五十二病方』の方が、さきに結論したように表層から内部にいたる、寄生性ないし化膿性の疾患を主としているのに對し、本草書古記載は、右の別稱類を全般的に通覽すると、「大熱（あるいは大溫）で、大毒有る」ものだから、「中風惡風（などの「風」類）、風寒濕痺、寒熱。腰、肩、膝、脚などの疼冷痛。」などを主とする傾向が強い。激烈な作用を應用するには變りはないが、應用の方向が異なるようである。

『武威醫簡』ではどうだろうか。『五十二病方』の場合とは異なり、ここでは「烏喙」の名稱だけではなく、「附子」が多く、「天雄」もあるが「烏頭」は出て來ない。まず、「烏喙」の場合を列擧すると

第3～第4簡 久效上氣喉中百蟲鳴るが如き狀態・内服（丸を口に含む）。

第6簡 傷寒（腸チフスその他の高熱病）を治し風（風邪）を逐^おう・内服（粉末）。

第42簡 魯氏青を治し行解、腹を解する（この病狀、やや未詳）・内服（粉末）。

第56簡（第55簡から續き） □□□□潰、醫者が治し得ない狀態（癰腫の類かとも思われるが缺字のため不明）・内服、外用の別も不明。

第79簡 久しく欬し、上氣して喉中百蟲鳴るが如き狀態・内服（丸を口に含む）。

資料として少なすぎて判斷出来ない。「附子」が使われている十例も整理して示すと、

第6、42の兩簡（右に既出、従つてこの兩簡では烏喙・附子の二者併用）。他の八例は、第8・廩のような聲で云々（「桂」で既出）・内服、第18および第89甲・百病・内服、第57および第71・千金膏（癰に塗る）、第81・手足麻痺および癰腫・内服、第87甲・各種の外傷・外用、第88乙・授乳婦人・外用、の各簡にある。「天雄」は、第84乙および第85乙・男性の泌尿ならびに性機能の疾患・内服、の二例である。

以上、別稱まで含めると、『武威醫簡』におけるこの品目の使われ方は、第57、71、81、87甲、88の各簡（いずれも附子）は明らかに、既に検討した『五十二病方』での「烏喙」の使われ方に近い。しかし、第3と4、6、79の各簡（以上烏喙）および第8簡（附子）での使われ方は、やはりさきに述べた本草書「本經文」・「別錄文」にみられる主治に通じるもののようである。

なお、『五十二病方』と『武威醫簡』以外でも、中國西方・西域に通じる玉門關付近で出土した『流沙墜簡』（一九一四年解讀刊行）、および西北方・甘肅省居延縣舊跡から出土した『居延漢簡』（一九四三年發表）の、各々に含まれる醫處方斷簡に、「烏喙」が使われており、しかもそれらの斷簡は漢代のものと推定されている。遺憾ながら、不完全でも醫處方の體裁を認め得るほどにまとまった斷簡が、どちらについても一、二に過ぎないが、その少數の處方の中に見出せるとい

うことは、「烏喙」という名稱がこの時代にごく一般的であったと推定出来る證據の一部になる。

薑

これは問題なくショウガ *Zingiber officinale* Rosc. の根である。馬王堆一號漢墓から出土した「薑」の現物も、この種であると報告されている。⁽⁶⁵⁾ 中國では、ずい分古い時代から知られているようであるが、もともと中國固有の植物ではなく、原産地は熱帶アジアということで諸家の見解は一致している。もう少し地域を絞って、「インド原産」と表現されることもあるが、それは、この品目が古代に西方へ傳わったときの名前で、現在の分類學上の屬名にも採用された「Zingiber」という語が、古代インドのサンスクリットから來ているとする、言語學的考察にもとづく。⁽⁶⁶⁾ とにかく、本來溫度と水分が充分なところで出來た植物だから、中國で栽培するようになって、華南、華中、それに四川などの諸地域ではよく育つが、華北では育ちが悪い。それは、南北朝までの華北農業の實際と在り方を集大成した、後魏・賈思勰の『齊民要術』の「薑の種え方」をみると、「・・・中國の土、薑に宜からず。僅かに活勢存す可きも滋息せず。種うる者、聊藥物に擬して小小のみ。」と述べているのでも分る。根は、採ったままでは持ちが悪いので、本草醫方では、いつでも間に合うように、何通りかの方法で充分乾燥させたものを使った。いわゆる「乾薑」である。生乾き程度のものも、あればもちろん使ったので、「生薑」である。華北や西北では、恐らく乾薑が主になっただろう。本草古記載では、乾薑が本經品、生薑が別錄品として入っている。この點についてはのちに考察する。成分が芳香と程よい辛味の物質であるので、古くから藥用だけでなく調味料などとしても使われて來ている。

『五十二病方』には、六用例が見出せる。そのうち一例は「干(乾)」字がついているし、もう一例、「枯薑」という名稱があり、長年月かけたひね生薑と思われるが、他の四例は「薑」字だけである。長沙の地なら、季節によっては生薑も

豊富であつただろうが、のちの本草書などが乾、生兩者を分けていくらか仰仰しく述べ立てているのに比べると、『五十
二病方』の場合は、兩者のわずかな差異にはこだわらないといった感じの、素朴な印象を受ける。使用例を略記して並べ
てみよう。

第1方 諸^{もろもろ}の傷・内服

第248方 牝痔（内痔）・干薑（薑は薑の古字）・外用（熏蒸・患處をいぶす）。

第271、275、299の各方 疽病（體內化膿性疾患）・内服（第271方は、酒で飲む。後二者も缺字のため明瞭でないが、恐
らく同じ）。

第372方 痢（癰）・枯薑・外用（膏藥）。

以上を、本草書古記載の主治と比較してみると、一見したところあまり合わない。「本經文」・「別錄文」ともに、痔の
たぐいや、疽・癰に相當する病名を擧げていない。「本經文」の「乾薑」の記載の中に「止血」とあるのが第1方あたり
に、「別錄文」の「乾薑」に「……諸毒、皮膚間の結氣（を主とする）」とあるのが第372方などに通じないでもないが、
それらよりも、右の六使用例全般に關連すると思われるのは、「本經文」が「乾薑」について「生の者尤も良し」と述べ、
そして「生薑」について「久しく服すれば臭氣を去り、神明に通じ」と述べている點である。この「本經文」そのもの
の重點は、最後の二句にあるようで、具體的な病氣による臭氣を指しているわけではなからうが、この品目、殊に「生^{なま}薑」
のものがもつ強い芳香は、色々な臭氣を消す効果が著しい^著。右の六使用例、なかでも疽病などは、病氣が進行するとか
なり臭氣が強くなると推定されるが、「薑」はそれに對する抑えの役割の一端を期待されているのではなからうか。「椒」
（サンシヨウの類の果實）（1、271、275、299）とか、「桂」（既出。1、249、271、299、370）、あるいは「茱萸」（サンシユウ。
271、275）といった、いずれも芳香性のある品目を同時に使っていることも、その目的に添うわけで、「薑」を含めてこれ

ら芳香性品目は総合的に、臭氣およびそのもととなる邪氣・惡氣のたぐいを體內から逐い拂うと考えられたのであろう。

『武威醫簡』では、使用例が七つほど見られる。處方集としての、全體のポリュームを考えると、『五十二病方』におけるよりもずっと頻繁に使われていることになる。ところが全部「薑」一字だけの名稱である。さきに述べた、溫度と水分の不足から、武威のあたりでは「生薑」の生産が困難で、使えるのは、製品となつて他地方から送られてくる「乾薑」にほぼ限られていたのであろう。同じく西北邊境の『流沙墜簡』や『居延漢簡』でも、わずかな處方數しかないがこの品目は「薑」一字である。『武威』の七例をまとめて示すと

呼吸器系疾患が二例（第4簡と第79簡・久欬で上氣し、喉中百蟲鳴くが如き狀）。

どういう病氣がよく判らないのが二例（第8簡・鷹のような聲で云々、および第31簡……兩手頭に到らず臥すことを得ない狀態）。

泌尿系疾患が二例（第9簡・諸瘡）。

外傷關係が一例（第52簡・金創を治し痛みを止める）。

便の異常が一例（第82甲簡・激しい下痢が續き膿血を下し……醫者も手の下しようがなく引きあげる狀態）。

『五十二病方』とは、金創の第52簡が向うの第1方と似ているが、他は全く合わない。

本草古記載では、「乾薑」の「本經文」および「生薑」の「別錄文」の各々の主治に、「上氣」とあつて、右の第4および79の二簡に通じる。また、「乾薑」「本經文」主治に「腸澼下痢」とあるのは、右の第82甲簡に關連を付け得るが、他は何とも言えない。ただ、同時に併用されている他品目を見ると、『五十二病方』におけると同様に、「桂」（七例全部）、「椒」（4、79、8、31）が目につく。病氣の種類如何にかかわらず、これら芳香性品目の總合作用によって惡氣・邪氣を逐い出す意識が、ここでも讀みとれる。

椒

これは「椒」一字のこともあるが、多くは秦椒、花椒、竹葉椒、大椒、蜀椒、川椒など、さまざまな形容詞がついた名稱で呼ばれる、一連の植物である。古い時代からある名稱のものは、分類學上、シカン科の *Zanthoxylum* サンショウ屬の内のどれかの種であり、皆同様の芳香と辛味を持っていて、醫藥および食物の調理・保存などに使われて來た。さらに、芳香を中心としたこの植物の特徴は、古代中國人の好みによく合い、儀禮・高貴の婦人の地位・相聞・多産など、さまざまな象徴的意味を表わすものとして多用された。この植物の、そうした文化史的意義については、水上靜夫氏の詳細な考究がある⁶⁹⁾。

醫藥としては果皮が主となるが、*Zanthoxylum* 屬のどの種が主に使われて來たかについては、始めに挙げたさまざまな名稱の問題と深く關連して、多くの先學により検討されているが、この小論の目標に添う意味でまず『一號漢墓動植物研究』をみると、一號墓からの出土品は、「竹葉椒」*Zanthoxylum armatum* D. C. (*Z. planispinum* Sieb. et Zucc.) の果實であると發表されている⁷⁰⁾。この種は、現在でも中國東南部から西南部にかけてそこかしこに野生し、その果皮は浙江・江蘇・廣西・湖南などの各地で「土花椒」として藥用に使っているという⁷¹⁾から、『五十二病方』の當時でも、彼の地ではこの種あたりが主に使われていたのだろう。『五十二病方』では、六つの處方に出てくるが、そのうち五例までが、「椒」一字である。(残る一例は、後で述べるように「蜀椒」) 六使用例をひとまず列挙してみよう。

第1方 諸傷・内服(煮汁)。

第17方 癰(泌尿系疾患)・外用(他藥と共に焼いて、患者の身體を薰蒸する)。

第271、299、303の各方 疽病(體内化膿性疾患)・内服(煮汁)。

第350方 疥癬・外用（膏藥にして熨す）。

この第350方だけが「蜀椒」である。

本草書古記載と比べてみよう。『證類本草』では、「秦椒」と「蜀椒」の二項目に分けているが、この區別は最古の『神農本草』や『名醫別錄』で、恐らく産地の別を主な基準として別々にしていたのを、『神農本草經集注』を經由してそのまま引き継いでいるのである。中國本草學の歴史においては、『證類本草』まではそのような傳統墨守方式による書目構成が原則であった。近代以降、分類學の見地からこの兩者の異同が論じられ、今日では、「秦椒」は、前述の「竹葉椒」と同じ *Z. planispinum* 種であったか、場合によっては實は「蜀椒」と同じ種を使っていたかも知れないとし、その「蜀椒」は *Z. Simulans* Hance syn. *Z. Bungeanum* Maxim. という、中國全域で分布している種であったとする見解になって來ている。⁷²⁾「蜀」の字が冠されたゆえんは、蜀地方では野生しているものを採取するに止まらず、早くから栽培もして多量に製品化し、他地方へどんどん送り出していたのであろう。そこで、右に挙げた『五十二病方』の「椒」五例を、まず本草の「秦椒」に照合してみると、「本經文」・「別錄文」ともに五例の病狀とは縁の無さそうな主治ばかり記して合わない。念のため「蜀椒」の主治に照合しても同じ様なものである。ただ、本草古記載と合わないにしても、「薑」の考察で述べたように、第1、271、299、303の各方では「薑」や「桂」などと組合せになっており、かつ、蜀椒の「本經文」〔主治〕の冒頭に「邪氣」とあるから、邪氣・惡氣を逐い出す役割には加わっていると思われる。⁷³⁾六つ目の「蜀椒」の例は、本草に「・・・皮膚の死肌（を主とする）」（本經文）とか「・・・膏藥に作る可し」（別錄文）といった句がみえるから、一脈通じる感じはある。

『武威醫簡』ではどうかというと、「蜀椒」の名稱で九つの處方に出て來る。「薑」の場合と同じく、處方集としての全體の規模からみると、『五十二病方』より頻度が高い。「椒」とか「秦椒」という名稱では出てこないのので、武威の當地で

は野生のものの採取はいうまでもなく、栽培も困難で、さきに推定したように蜀の地あたりから送ってくる薬としての既製品に頼っていたのではないか。『武威』と同じく西北邊境の『流沙墜簡』・『居延漢簡』の二例でも、*蜀椒*である。

實は『武威醫簡』には、*小椒*という名稱のものが一つ（91甲簡）出ている。近年出ている生薬關係の專書でサンシヨウ屬の果實の大きさを比較すると、*蜀椒* *Z. Bungeanum* のそれが他種に比してやや大粒らしいから、*蜀椒*とは別に、小粒の他種も少し入って來たのかも知れないが、この點はもっと多くの事例を探索して検討する必要がある。

*蜀椒*の九例を整理して示すと

呼吸器系疾患が二（第3、79簡・久欬上氣、喉中百蟲鳴くが如き病狀）。

病種不明が二（第8簡・鷹のような聲で云々、および第31簡・・・・兩手頭に到らず臥すことを得ない狀態）。

ここまでは、*薑*の『武威』での例と重なる。従って、*薑*で考察したように、他の芳香性品目（*薑*・桂）との總合作用で邪惡の氣を逐い拂う意圖があるう。しかし、残りの例が *薑* の場合とはちがっていて、

瘀病（色々な原因で體内に血液が鬱積している狀態）が一例（第11簡）・内服（煮汁）。

あとは、百病（に效く）膏藥（に入れる）第18、89の兩簡。千金（の病に效く）膏藥に入れる・第57簡。かさぶたや、灸・乘馬でできた傷（第87簡）・これも膏藥となる。従って、『五十二病方』の最後の例と同じく、本草「別錄文」にある「膏藥に作る可し」の線に添っているのである。

藜蘆

これはユリ科の *Veratrum nigrum* L.（現在の中國名は黑藜蘆⁽⁷⁵⁾）の根莖に當てられて來た。しかし廣大な中國のことであるから、各地にさまざまな變異型が分布し、それらには有效成分の相似たものも多く、同一の藥材として使われている。

變異型の各々で成分の作用に多少の強弱があるようだが、おしなべて猛毒に近い。それだけに薬として使っても強力な譯である。『五十二病方』に出ている六例を挙げると

第350、362の各方 痂（疥癬）・外用（350方は膏藥、362方も同様かと思われるが缺字のため未詳）。

第366方 癰（悪性のできもの）・外用（熨し藥）。

第413、418の各方 瘡病（乾疥、すなわち皮癬）・外用（膏藥）。

第421方 身疔の病（未詳であるが、釋文の始めに「名無くして痒し」とあるので、やはり皮膚病の類）・外用（膏藥）。本草書古記載を見ると『證類本草』の「藜蘆」の「本經文」には「……疥癬惡瘡（を主とする）」とあって、まさに適合する。「別錄文」には「……馬刀爛瘡を療ず」とあるが、「本經文」のようには合わない。

『武威醫簡』には一例ある。それは、第57簡から始まって延々と続く長大な記載の處方・千金（の病い）を治療する膏藥方・の中で、鼻に血や膿がつまって通じないときに、他藥（附子その他）と共に酢で浸出液を造り、鼻にそそぎ込むのである。『五十二病方』の使用例とはちょっと様子は異なるが、化膿性疾患に對し、外用に近い使い方であり、實質的には似ている。なお、この例は「附子」と併用しているが、右の『五十二病方』での使用例のうち、第350、366、413の各方は「烏喙」を併用している。藜蘆・烏喙（附子）それぞれ作用の傾向が異なり、併用しても必ずしも相乗的には強まらなかったのかも知れないが、毒物を併用すればよく効くには効いても、ずい分猛烈な調合薬になったのではなからうか。「薑」および「椒」で考察した芳香性品目の併用による總合作用の期待と考え合わせると、類似の特徴をもつ複數品目の併用という方式は、これらの古代處方の一つの特徴といえるのではないか。なお検討を要する。

甘草

これは、本草・醫方では後々までずっと多用された、いわば中國生藥（しょうやく）の代表ともいえる品目である。醫藥として使われたばかりでなく、強い甘味の故に古くから食品加工・調理にも使われた。原植物は、マメ科の *Glycyrrhiza uralensis* Fisch.（現中國名も「甘草」）が最も古くから一般的であった。この種は、中國東北・華北から西北、および新疆・青海の地方にまで廣く分布していたが、中央アジア一帯にひろがっていた、ヨーロッパ系の *G. glabra* L.（現中國名は「光果甘草」）という種、またはその變種も、古くから中國に入ったようである。なお、藥に使うのは、太い主根である。

『五十二病方』での使用例は、

第 1、17、23 の各方 諸傷・内服（但し 1 と 23、17 は缺字のため不明）。

第 44 方 傷瘕（傷を受けて、風が傷に入り、身體、殊に頸筋くびが強直している状態・恐らく破傷風）・外用、内服不明。

第 275 方 疽（體內化膿性疾患）・内服（煎汁）。

本草古記載では「本經文」に「……金瘡腫を主とする（腫は腫）」とあり、「解毒」ともあるから、一應は合っている。

『武威醫簡』では

第 52 簡 金創を治し痛を止める處方・内服。これは右の「本經文」にちようど合う。

第 82 乙簡 激しい下痢が長く續き膿血を下し、……起き上れず……腸内が痛む症狀・内服。

第 88 甲簡 授乳婦人を治す膏藥方。

この二例は、前者は合う記載が無い。後者は病症自體の意味が定めにくいと同様である。

薤

これらはラッキョウ *Allium chinense* G. Don. に當てられている。ラッキョウは、中國で古代から廣く栽培され好まれて來た農作物であつた。⁽⁷⁾すでに検討して來たように、『五十二病方』では、純然たる農作物を處方に採用する傾向が著しいから、この「薤」も特別な藥物専門品目ではなく、身邊の普通のラッキョウであつたとみられる。『五十二病方』での使用例は、

第43方 傷瘕（傷から風が入って身體が強直、破傷風）・内服（煮汁を飲んで汗を出す）。

第78方 瘰（さそりに刺された毒）・用法不明（缺文）。

第182方 瘰（泌尿系疾患）・内服（煮汁）。

第433方 涿（凍傷）・外用（嚙んで傳ける）。

『證類本草』を見ると、「本經文」に「金瘡、瘡の敗れたるを主とする」とあり、「別錄文」に「病人の諸瘡を利す。風寒・水に中りて腫れたるはもつて之を塗る。」とあつて、なかなかよく合致する。

『武威醫簡』には、全く出て來ない。別稱および類似品目のたぐいも見當らない。

黃芩

『五十二病方』釋文では、この名稱の二番目の字が、「鈴」、「黔」、「杓」などの異字になっているが、すべて「芩」字に同じとしてあるので、その判斷に従つてゆく。

「黃芩」は、シソ科のコガネバナ *Scutellaria baicalensis* Georgi で、日本には野生はないが栽えれば育つので、和名

もつた。中國では、この種が南方を除いて廣く分布するものの、やはり各地に變異型があつて、同じ藥として使われているという。藥には、ふつう主根を使う。變異型の中には、花色が黄色ではなく、藍色、藍紫色、紫色のものなどあつて、**「黄黔」**といった名稱（異字）は、そういうものを指すのかも知れない。『本草綱目』李時珍がその點をちょっと述べている。『五十二病方』に出てくるのを列挙すると、

第17方（黄鈴）、第19方（黄黔）の兩方 諸傷・外用（煮汁あるいは膏）。

第44方（黄黔） 傷瘡（破傷風か、それに類似の症狀）・外用、内服不明。

第68方（黄鈴） 夕下の病（皮膚病の類）・外用（煮汁を付ける）。

第262方（黄黔） 牝痔（内痔）で巢、直を塞ぐ（病巢が直腸を塞いだ）状態・外用（黄黔を粉にして病巢につける）。

第289方（黄芩） 血疽（血管系の化膿症狀）・内服、外用不明（缺字の爲）。

『證類本草』を見ると、**「黄芩」**の「本經文」に「……惡瘡、疽蝕」と主治があり、右の用例に通じる。「別錄文」には「……其子、腸澼・膿血を主とする。」とある。ただし、右の289方は**「黄芩」**の種子や果實を指定しているわけではない。

『武威醫簡』では五例ある。略記すると

第15簡 金創内瘻、創養……（右の『五十二病方』44方と同様の、破傷風症狀）・内服。

第46簡 伏梁（脇腹ふくれ、上下左右に根がある病狀）で胃腸の外に膿血がたまっている。恐らく内服。

第82甲および乙簡 激しい下痢……膿血を下し……醫者が治せない病狀・内服（始めの處方に**「黄芩」**を使い、あとで追加する）。

この46簡の症狀は『五十二病方』の289方に似た、血管系の化膿性疾患かも知れない。全體に、**「黄芩」**の使い方は、『五十二』と『武威』でよく似ている。品目名の字は、『武威』では**「黄芩」**だけである。『武威』では、この品目も製品化さ

れたものばかり使って、生植物（原植物）の花冠の色などには氣が付かなかったのであろう。

白斂

『五十二病方』では「白蔕」の字で出て来るが、現在の中國では「白蔕」、そして日本の漢字で「白斂」となる。原植物は、中國に廣く分布するブドウ科のビヤクレン *Ampelopsis japonica* (Thunb.) Makino であって、問題はない。古く日本に渡來して、學名のもととなった。藥には、根を使う。『五十二病方』での用例を示すと

第271方 疽病（體內化膿性疾患）・内服（骨疽の場合は、この「白斂」を倍量にするとある）。

第275方 疽病・内服（右の271と同對象だが、他品目の數が少なく、より簡単な處方）。

第283方 噎疽（のどの疽病）・内服。

第289方 血疽（さきの「黄芩」で出た處方）。

『證類本草』「本經文」はこの品目の主治を「癰腫、疽瘡を主とし、結氣を散じ痛を止め熱を除く。・・・」と述べていて、まさに適合する。「別錄文」は、主治を僅かしか述べず、かつ右の諸例とは外れている。

『武威醫簡』は一例あつて

第5簡 □□□□□□□□潰れて醫者が治し得ないのを治す（このあとも原文脱落のため）何の病氣がよく判らないが、潰瘍状のものらしく、「本經文」には添う線である。

陵枝

『五十二病方』に四例ある。釋文および注ではこれを「菱菱」としている。すなわち水生植物のヒシ *Trapa natans*

「」である。非常に堅い殻に包まれた實だから、もちろんそれを割って、中のでんぶんの塊かたまりを出して使ったのである。四例とは

第351、353の兩方 痂（疥癬）・外用（膏藥）

第410方 乾癢（皮癬）・内服（煮汁を）。

第419方 身疔（身體の皮膚病）・外用（膏藥）。

本草古記載の「別錄文」は、「中を安じ、五臓を補し、饑えず、身を軽くする。」などと、明らかに道術系の記載で、右の使用例と全く無関係である。（この品目は、いわゆる別錄品で、「本經文」は無い。）つまり、この品目は、長沙のあたりでありふれた、手近の自然物として採用されており、右の使用例の、外用の三例（351、353、419）については、¹⁸黍の場合と同じく、患部に膏藥として塗り擴げるための、展着劑としての役割を主に擔っているであろう。

『武威醫簡』には、見出されない。この品目を含め、今まで検討して來た諸品目で分るように、『武威』は、本來的に藥物として使用されて來た品目でなければ、使わないのである。

四、まとめと考察

菽は、典型的な農作物品目であり

本草書では全く別の名稱となるにもかかわらず

『五十二病方』では「本經文」と「別錄文」の双方によく合う使われ方である。そして

『武威醫簡』では全く使われていない。

葵は、やや農作物的な生薬品目であり

本草書でも基本的にはこの名稱で通り

『五十二病方』では「本經文」と「別錄文」の双方によく合う使われ方である。そして

『武威醫簡』では全く使われていない。

黍、禾、米・三種の穀は、典型的な農作物品目であり

本草書では、ややのちの色々の品種名で記載が分れて錯綜し

『五十二病方』での使われ方は「別錄文」と合わない。「本經文」には品目自體がない。

『武威醫簡』では、ほとんど使われていない。

桂は、典型的な生薬品目であり

本草書では多少の形容詞が付加される場合はあっても基本的にはこの名稱で通り

『五十二病方』と『武威醫簡』の雙方で、「本經文」と「別錄文」が示す原則に添った使われ方である。

烏喙は、猛毒であるが、それだけに強力な生薬品目であった。烏喙というのは使う根の偶然の形に意義を持たせた名稱で

本草書では無理のない烏頭の名稱におき換えられ、かつ植物状態のちがいによりいくつかの別稱も生じた。

『五十二病方』での使われ方は「本經文」・「別錄文」と全體としては合致し難く、

『武威醫簡』では比較的本草書に近ずいた使われ方で、別稱も用いられている。

薑は、食生活にも関連を持つ生薬品目であり

本草書では乾・生の二名稱に分れ

『五十二病方』での使われ方は、具體的には「本經文」・「別錄文」に合わないが根底には臭邪氣拂いで通じるところがある。

『武威醫簡』ではこの品目の入り方がちがうのでまた異なる使われ方だが右の根底思想は認められる。

椒は、さらに顯著な嗜好性をあわせ持つ生薬品目であり

本草書ではさまざまに形容を付けた名稱がある。

『五十二病方』および『武威醫簡』での使われ方は、薑の場合に似てやや象徴的な邪惡氣驅逐が認められるが、「本經文」・「別錄文」の具體的な主治表示に添うところもあり、その傾向は『武威醫簡』でより明らかである。

藜蘆は、強力な生薬品目で毒性もある。

本草書でもこの名稱で通る。

『五十二病方』での使われ方は「本經文」によく合う。

『武威醫簡』では一例だが同様である。

甘草は、代表的な生薬品目であり他方面にも有益である。本草書でも問題はない。

『五十二病方』および『武威醫簡』での使用例数は意外に少ない。使われ方の、本草書古記載に對する合致度は、「本經文」の主治のごく一部分に合うといえる。

薤は、古くからの農作物品目である。

本草書でも始めからこの名稱で入っている。

『五十二病方』での使われ方は、「本經文」・「別錄文」の双方によく合う。

『武威醫簡』には全く使われていない。

黄芩は、作用のはっきりした生薬品目である。本草書ではこの名稱で通っている。

『五十二病方』での使われ方は、「本經文」・「別錄文」にかなりよく合うが食いちがいも感じられる。

『武威醫簡』での使われ方は、『五十二病方』でのそれとよく似ている。

白斂は、原植物も本草書での在り方も明瞭な生薬品目である。

『五十二病方』での使われ方は、「本經文」によく合う。『武威醫簡』では不完全な一例だがやはり合う。

陵枝は、漢の時代には恐らく生薬品目ではなかった。本草へは少しのちに別名稱が入った。

『五十二病方』での使われ方は、「別錄文」とは全く異なる。「本經文」には品目自體がない。『武威醫簡』には使われ

ていない。

次に、以上のような主要品目各個の検討成果をふまえて、全體的に考察し、『五十二病方』と『武威醫簡』の、本草體系との關連における位置付けを試みる。

この二つの處方集は、いわゆる民間療法のレベルをはるかに凌駕した本格的な内容と規模をもつから、これだけのものが構成されるには、豊富な知識・知見を提供する關連體系が基礎としてとうぜん必要であり、その關連體系は次の二種類が主である。

A・原本草體系

B・農作物知識體系

このA・は、非常に古い時代から、強力で確實な作用を示す藥物として知られて來た自然品目の體系であり、各論で検討したうちの桂・烏喙・薑・椒・藜蘆・甘草・黃芩・白朮の各品目がこのA・から出ている。⁷⁹

一方、B・は、やはり非常に古くから食用に供せられて來た自然物の知識の蓄積であり、各論で検討したなかの菽・葵・黍・禾・米・薤・陵枝の各品目がこのB・に屬する。⁸⁰

そして、『五十二病方』では、全體としてA・がもちろん主軸を成しているけれども、B・も幅廣く大きな支えとしてこの處方集の構成に加わっていることが確められたが、『武威醫簡』は、もっぱらA・で處方が組立てられており、B・を構成要素として含んでいない。⁸¹ すなわち、検討した限りについて、

『五十二病方』はA・B・の二元的構成であるのに對し、⁸²

『武威醫簡』はA・のみの一元的構成である。

右の結論は、この二つの處方集が作られ使用された兩地方の情況のちがいにも關連付けられるのではないか。馬王堆漢墓群のある長沙の地は、氣候水利交通の便に恵まれ、多彩で豊かな農業生産が保障されている⁸³。人々は農作物の中には確かな藥效もあわせ持つ品目が數々あることを熟知しており、それらを含めて大規模な處方集が構成されても不思議ではない。一方、武威の地は、氣候風土が厳しくしかも邊境であるため、農作物について廣く深い知識は得難く、いきおい、製品化されて遠隔地へも流通する藥用專門品目・およびそれらの專門品目についての知識體系（すなわちA・）だけに頼らざるを得なかったのではないか。

なお、各論での検討をもとに、右でA・B・と分けた關連體系自體について少し考察する。

A・は、現存の本草體系の初期段階につながるもの、等しくはない。それは、A・系統の各品目の名稱や適用病狀が、現存の本草書古記載とはかなり異なっている場合が多かったことから分る。また、『五十二病方』と『武威醫簡』の各々の構成年代は、同じ漢代でも前後に大きくへだたっているようだが、ずっと後に構成された『武威』の方が、『五十二』よりも本草古記載に近いかという、検討の限りでは大幅な差は認め難い。むしろ、『五十二』で頻用されていて、『武威』では使われていないB・系統の各品目が、名稱や適用病狀の大きな變化はあるものの、すべて本草古記載に收録されている。ややこまかくみると、B・系統の品目のうち、菽・葵・薤といった「菜」類は「本經文」・「別錄文」の兩方に出ているが、黍・禾・米の「穀」類および陵枝は、「本經文」ではなく「別錄文」に出る。あれこれ考え合わせると、

A・は、『武威醫簡』が構成されたころまでは、強力な藥效のみに價值がある、いわば藥用專門品目から成る、範圍の狭いまとまりであった⁸⁴。廣大で、上古から醫藥の道がよく進んで來た中國だから、そのまとまりは一本ではなく、原神農本草體系・原名醫別錄體系といった、複數で存在していたのだろう。そのうち、梁・陶弘景の『神農本草經集注』にいたる間に、右のB・系統から多くの品目を採り入れ、同時に各品目の名稱や適應病症も改められることが多く、構成と内容

の両面で著しく變化していったと思われる。B・系統からの品目の採り入れについては、原別錄體系の方が原神農體系よりも廣範圍であつたようだ。

こうした、現存古記載以前の本草書の姿については、さらに多くの検討が必要である。

この小稿を終るにあたり、絶えず啓發と助言をいただいている京都大學人文科學研究所・科學史研究班の諸先學に深く感謝する。また、色々御教示を受けた京都大學理學部植物學教室の諸先學にも深く感謝する。

註および参考文献

- (1) 湖南農學院・中國科學院植物研究所・南京藥學院・中醫研究院・馬王堆一號漢墓中醫中藥研究組 その他 編『長沙馬王堆一號漢墓 出土動植物標本的研究』北京 文物出版社刊 一九七八年、七頁～八頁による。なお、この文獻を以下『一號漢墓動植物研究』と略稱する。
- (2) 北村四郎『有用植物學』朝倉書店刊 一九五二年、七七頁～七八頁などによる。
- (3) 中國科學院植物研究所編『中國主要植物圖說 豆科』北京 科學出版社 一九五五年、の總説および各論部分などによる。
- (4) 『一號漢墓動植物研究』八頁～九頁による。
- (5) 以上の二處方(74と85)は、藥の修治の記載部分に缺字があるが、前後の文から外用あるいは内服したものとする。
- (6) 『說文解字注』藹(「藹」、未(「救」)之少也。「段注」少讀養幼少之少。毛詩傳曰藹猶苗也、是也。李善引說文作豆之葉也。
- (7) 肝は、脛の上の方。釋文註によれば、脛はすなわち膝で、『說文』に、「炙也」、『一切經音義』卷七に「今江北謂炙手足爲炙療」、すなわち小腿部の燒傷であるという。
- (8) 釋文、菽字の次が缺字だが、菽字の前が熬(いる)字であるので、豆とした。
- (9) 『五十二病方』との直接のつながりを論議できるほど古い時代の本草書は、すべて早く亡佚したとされているが、幸いにも、そうした書の斷章は、のちのちの本草書にかなり忠實に收録・繼承されている。その代表的なものが、いわゆる『證類本草』に收められている「神農本草經文」(「本經文」と略稱)および「名醫別錄文」(「別錄文」と略稱)である。『證類本草』としては、善本の評が高い金・張存惠重刊の『重修經史證類備用本草』の影印本を参照する。
- (10) 本草書でも、のちの『本草綱目』では、編著者・李時珍が、このような名稱の問題を説明している。また、ダイズは本來、中國の主要農作物の一つであるから、その分野の研究で名稱の解釋・考究はなされて來ている。
- (11) 豉は從來、ナットウと譯されて來たことがあつたが、それは適當でない。西山武一・熊代幸雄『校訂譯註 齊民要術』アジア經濟出版會 一九六九年(第二版)参照。
- (12) 峻下劑として、古來有名である。本草書でも「本經文」に出ている。

(13) 皂莢も樹木であり、豆は著しく扁平、藥效は去痰作用である。

(14) 本草書では、古くは大豆は品目として獨立しておらず、大豆黃卷、

(豆モヤシ)の條に附されてあった。しかし、發芽していない種子である大豆と、發芽したのちの大豆黃卷とは物質狀態が違ってくるから、當然、藥效も異なるので、北宋代の醫藥書大改訂事業の一環として『嘉祐補注神農本草』が編纂された際に、分條された。それより以後、本草書では、種子狀態のダイズを大豆黃卷と明瞭に區別する意味で、生大豆、という品目名で呼ぶ。生のまま使うわけではない。

(15) チベット西南部の、海拔三千米以上の地でも自生しているという。青海省生物研究所編・『西藏阿里地區動植物考察報告』・科學出版社・一九七九年の一二三頁。

(16) 『一號漢墓動植物研究』十六頁、十七頁による。

(17) 不明は、原文中の缺字のため。次も同じ。

(18) 第152、167、169、170、172の各方の、泌尿系疾患は、原文では恐らく、瘵病である(その病名の部分は脱落しているが、處方の内容から、馬王堆漢墓帛書整理小組の學者達はそう判斷している)であり、その判斷は妥當と思われる。この第192方は、また別の尿の異常の場合である。

(19) 不明は、原文中の缺字のため。

(20) 陶弘景は、西曆五〇〇年ごろに、『神農本草經』に『名醫別錄』から選んだ記載を合わせて本草書を新編集し、自らの註文も加えて『神農本草經集注』を完成した。『證類本草』に收められている陶弘景の文は、その際の註文である。

(21) 藥物を使う際に、古いものを指定することは、この、莢の場合に限らず、『五十二病方』の他の品目についても、『武威醫簡』や諸本草書の中でも、よくある。具體的な他例は挙げないが、有效成分物質の安定度が高まったり、あるいは作用が激しい物質の場合は、かなり分解・變質して作用がやわらいで來ているのを期待しているなど、個々のケースにより意味は異なる。

新出土醫藥資料における自然品目の探究

(22) 残る一つは、女子癰である。

(23) 赤堀昭「神農本草經に記載された藥效」・『日本醫史學雜誌』第二十四卷第一號所收・昭和五十三年、七頁、八頁による。

(24) こういう高等植物では通道組織が發達しているから、一つの個體(株)内で物質の傳播・交流がかなり活發におこなわれ、物質分布が等質化するのが普通である。

(25) 『一號漢墓動植物研究』六頁による。

(26) 黍の栽培の起原については、ド・カンドル著 加茂儀一譯『栽培植物の起原』(上)(中)(下)岩波書店 一九五三年(原著一八八三年)は、いかにも内容が古く、かつ、東アジアについては検討不十分で參考にならない。N・I・ヴァヴィロフ著 中村英司譯『栽培植物發祥地の研究』八坂書房 一九八〇年(原著 一九六七年)の考究が主な力となる。他にも注目し値する研究はあるが本論から離れすぎるので略す。

(27) 美黍米、すなわち上質の黍米(精白したもの)という指定がある。

(28) (29) 『說文解字注』卷七 禾 嘉穀也。〔段注〕……嘉穀之連稿者曰禾。實曰稟。人曰米。米曰梁。今俗云小米是也。

(30) 俗にいう、ネコジャラシ。

(31) 北村四郎「中國栽培植物の起原」・京都大學人文科學研究所刊行『東方學報』第十九冊所收・昭和二十五年による。

(32) ここに挙げる第114方以外にも、第103方にも、禾は出てくるが、そこでは藥物としてではなく、まったくの呪術の道具(わら人形)として使われているので、採らなかった。

(33) 原文中に缺字あり、意味判定し難い。

(34) 恐らく、は原文缺字のため。註(5)参照。

(35) さし當って參考としたのは、註(11)や(26)に挙げた文獻などである。また、本草資料は新しすぎるだけでなく、それ自身の價值觀で體系化されてゆき、實際の品種はヒトの實生活の影響で浮沈してゆくから、長年月のうちに、稷がアワからウルチキビになってしまったりす

る。

- (36) アワは、肥料が少なくすみ、他の穀物に比べて畑にある期間も短いので、高い山の畑にも栽えることが出来る。また、他の作物の栽培初期に失敗したときに、アワならそれから播ける。さらに、他の作物との輪作にも好都合である。いわば便利な作物で、それだけに、土地土地のそれぞれのこまかい特徴に合う品種が、求められることになる。

- (37) 『一號漢墓動物研究』七頁による。

- (38) 米字の前に缺字が五つある。

- (39) 原文の修治の部分に缺字多し。

- (40) 米は、もとは穀類の脱穀・精白した状態のものを意味した。

- (41) 『名醫別錄』にあったのを選び出して、『神農本草經』に付入した品。註(20)参照。

- (42) 陳燦『中國樹木分類學』上海科學技術出版社 一九五七年、三三一頁と三三七頁 などによる。

- (43) 刈米達夫・北村四郎 共著『藥用植物分類學』廣川書店 一九六五年、九五頁 などによる。

- (44) 白井光太郎監修並校正・木村康一新監修『新註校定 國譯本草綱目』春陽堂 一九七五年、の第六冊・一三七頁新註。

- (45) 79簡が、この3簡と全く同じである。『武威醫簡』は、内容が三群に分けてまとめられていて、群間にはこのような重複が部分的にみられる。

- (46) 第三群(79以下)は両面に記載あり。表が甲、裏が乙。

- (47) 六例あり、全體の一割以上になる。

- (48) テキストⅡ、31Pによれば、帛原文では鳥喙の、喙はすべて、篆字であるが、これは當時の喙の俗字であるという。そして、鳥篆すなわち鳥喙は、鳥頭の別名とだけ記されていて、その説明は加えていない。『本經文』鳥頭・味辛、溫、主中風惡風洗出汗、除寒濕痺效逆上氣、破積聚寒熱。

「別錄文」鳥喙・味辛、微溫、……、主風濕陰癰瘰癧寒熱歷節(以

下略)

- (50) 神農文で、汁を煎じたものを、射罔、と名付けている。罔は禽獸魚類を捕える網。アイヌがこの毒矢で熊狩りをしたのは有名である。

- (51) 前漢初期の淮南王劉安による『淮南子』の「繆稱訓」に「物而毋不被用。天雄・鳥喙、藥之凶毒也。良醫以活人」とある。

- (52) 中國醫學科學院藥物研究所等編『中藥志』第一冊・人民衛生出版社・一九七九年、一二八頁〜一三二頁。なお『中藥志』は、一九五九年から一九六一年にかけて、やはり中國醫學科學院藥物研究所など、その

- 時の中國の藥用自然物關係研究機關が總力を擧げて協力編集し、四分冊に分けて刊行されたのがもとであるが、一九七九年から、爾來二十年間の學問進歩をふまえて大幅な改訂が始められ、一九八〇年三月現在で第一冊が公刊され世に出ている。これを新版とした。

- (53) 同右一三一頁〜一三六頁。黃草烏(雲南・貴州)、多根烏頭(新疆)、瓜葉烏頭(四川・湖北)、圓錐序烏頭(吉林・遼寧)、松潘烏頭(陝西・青海・甘肅)、太白烏頭(陝西太白山一帶)の六種類である。本文に紹介した二種類と合わせて八種類について、原植物の檢索表も示されている。

- (54) 『證類本草』卷六の「人參」の「別錄文」に「……人形の如き者は神有り」とある。「人參」という名稱が元來をうした發想から來ているので『本草綱目』李時珍によれば、もと「人漫」と書いた。長い間かかってゆっくり長成し、人のような形になると神效をもつにいたるという意味であるが、漫字が劃が多過ぎるので、後世、簡便な參字になったという。

- (55) 同氏の「武威漢代醫簡について」・京都大學人文科學研究所刊『東方學報』第五十冊所收・昭和五十三年二月の九頁による。

- (56) 『隋書』卷三十四(志第二十九・經籍三)に、梁代に成ったという本草書類を數々擧げている中で「華佗弟子吳普本草六卷」とある。完全な書としてはもちろん残っていないが、このように斷片的に後の書に散入している。

(57)

「腦」は、主根上部の丸みを帯びた部分。人の頭全體の形になぞらえている。『淮南子』「俶眞訓」「雲臺高くして、墮ちる者背を折り腦を碎く。」

(58)

『證類本草』卷十に引く「鳥喙」の「別錄文」は、その一部分を本文にも検討の對照として示したとおりなかなか具體的であるが、その最後に「……長さ三寸已上は天雄と爲す」と明記している。また、同じく、附子の「別錄文」には、「……冬月採りたるを附子と爲し、春採りたるを烏頭と爲す。」とあるが、これはやや不明瞭である。また、「別錄文」は、附子↓健爲および廣漢（ともに四川）、烏頭↓朗陵（河南省確山縣南）、天雄↓少室山（河南省登封縣北）と、産地を別々に示している。陶弘景の註文あたりから、四者の生物學的な履歷のちがいををもっといねいに論じるようになり、唐代のころまでには明瞭な區別が自明となったようである。

(59)

「白付」という名稱が一例出て来る（第415行）。これが「白付子」なら、附子烏頭天雄などとは別に、別錄品として本章に登場する品目で、この三者と同屬の植物である（現中國名・關白附、學名は略）。しかし、釋文註ではこの名稱について、ひとまず「白附子」としながらも、「一説、すなわち『證類本草』卷三十に引く『名醫別錄』云うところの、「白符、一名女木、巴郡山谷に生ずる。」とする。」といっている。これは、全くちがった系統の植物である。併用品目とのかね合いなどの面から、なお検討を要するのであろう。

(60)

調合したあとが缺字のため不明。
瘵は、腹中の大きなしこり（女性の子宮筋腫）。餘雲岫編著・『古代疾病名候疏義』・人民衛生出版社・一九五三年 による。

(62)

烏頭の絞り汁である。射罔（註50参照）についての「別錄文」には、「……瘵堅を療す……」とある。

(63)

『一號漢墓動物植物研究』三十八頁。

(64)

ラウファアの『シノ・イラニカ』（Berthold Laufer "Sino-Iranica, Chinese Contributions to the History of Civilization in Ancient

新出土醫藥資料における自然品目の探究

Iran", Published by the Field Museum of Natural History, Chicago, 1919) の五四五頁などに論じられている。

(65)

同書卷三・種薑第二十七。

(66)

古くは日光に當てるなどしていたが、ほどなく蒸したりする操作も加わった。

(67)

調味料などに使うのも、もちろんこの効果が一半の理由である。食肉の臭氣を消すのによい。

(68)

皇后の御殿の壁にサンショウを塗り込めたことなどはよく知られている。後漢の曹襲『漢儀』などに出ている。

(69)

水上靜夫『中國古代の植物學の研究』・角川書店・一九七七年の一七四頁〜一九四頁。

(70)

『一號漢墓動物植物研究』三十二頁。

(71)

江蘇新醫學院編『中藥大辭典』上下二分冊および附篇（索引その他）・上海人民出版社・一九七七年。これは多くの藥用植物について、各地方植物誌や専門雜誌などに出ている研究成果を簡潔によくまとめている。竹葉椒については上冊九〇五頁〜九〇六頁。

(72)

北村四郎『明清の植物名物學』（數内清・吉田光邦編『明清時代の科學技術史』京都大學人文科學研究所・一九七〇年 所收）においては、そのような見解が述べられている。『中藥大辭典』が、花椒の項目（上冊一〇五七頁〜一〇五九頁）でまとめている最近の中國での同定も、小異はあるがそれに近い。もっともそこでは *Z. simians* 種を *Z. bungeanum* 種から分けて「野花椒」としている。さらに別の種も挙げているが略する。生藥學者の研究およびその成果としての記載は、當然のことながら現在使われている種類に焦點が定められており、歴史的觀點の比重は軽くなるから、その點注意は必要である。

(73)

こうした「芳香性品目の組合せ」による惡邪氣拂いについては、組合せそのものは本草書に具體的記載は見出し難いが、民間習俗としての周知の「屠蘇」の行事と深い關連を持つと推定される。日本にも早くから傳わり廣く行われている「屠蘇」は、中國ではすでに梁代・宗

懷撰『荆楚歲時記』に具體的に説明されており、原型的なものから古く、後漢・崔寔の『四民月令』に見出されるほどであり、そして『屠蘇』における芳香性品目の組合せは『五十二病方』と酷似している。

(74) 時代は少し下るが元代・忽思慧の『飲膳正要』第三卷「科物」の中に、『小椒』がある。胡椒（コショウ）の次に出ているので、胡椒と對比する意味で、『小』字をつけたのかも知れない。蜀椒、花椒などの他名稱は全く見當らない。

(75) 花冠の色が黒いので、『黒』字がついた。

(76) 「別錄方」では、『國老』という異名も挙げている。處方に使用された際、他薬に對する指導的地位を意味している。

(77) バビロフは、中央アジアあたりでも中國人の影響が大きいところでは、このラツキョウその他中國人の好む野菜が栽培されていることを指摘している。（註26に紹介した『栽培植物發祥地の研究』二四八頁～二五〇頁）

(78) ヒシは良質のどんぶんを含み毒も無いから、食用にもなる。救荒品として心得られて來たのはもちろんであり、さらに湖沼河川など陸水環境が豊富である地域では、かなり常用もされて來た。現在でも、例えば『廣州蔬菜品種志』（上海人民出版社・一九七四年）などには、大粒の優良品種が挙げられている。馬王堆の當時の長沙あたりでも、單に野生の植物というだけでなく、食料品として身近に意識されていたのであろう。

(79) 『五十二病方』（および『武威醫簡』）で使われている回数が極く少ないので各論で採り挙げなかった品目のうち、黃耆（タイツリオウギ・強壯利尿補虛など廣範圍な藥效）、朮（オケラ・健胃補虛など）、芍藥（シヤクヤク・鎮痛收斂緩和など）といった品目は、やはりこのA系統である。

(80) 『五十二病方』には、葱（ネギ・傷寒——急性熱病その他に有效）、瓜瓣（カモウリ、トウガンのひさこ・煩躁熱渴などを止める）といっ

た品目も一・二回使われている。

(81) 『武威醫簡』で農作物的品目を強いて挙げると、『菽』で引き合いに出した『荅』すなわちアズキが『武威』にも一例あるのと、『米』で紹介した『米汁』の一例がある。他に『蘗米』というものが一例あり、これは穀類のもやしのことで、消導（すなわち酵素作用）がもう知られていたのである。従って食品としてでなく、藥用の他に醸造などにも用いる専門品目として意識されていたようである。

(82) 『五十二病方』には、呪術的な處方が非常に多い。記述方式の説明で述べたように、そうした處方はこの小論の考究對象から外したが、もしそうした處方群を一つの原始醫療體系と考えたと『五十二病方』はさらに多元的ということもできる。

(83) 『一號漢塞動物植物研究報告』では、出土した文物のうちの農作物・家畜・生活具類などの種類の多さ・發達程度を特に強調している。農作物の種類・品種の豊富さは、殊の外著しいという。同書・十九～二十頁。

(84) 『薑』および『椒』のところ、その點を具體的に指摘した。なお、『桂』というような品目も、武威あたりでは全くの製品としてのみ手にしている、原植物など想像も困難であつただろう。それにも拘らず、『武威醫簡』でも頻用されていることは、こうした藥用専門品目の全國的な流通は、當時よく行われていたと考える根據になるだろう。

(85) 適用病狀の變遷と關連して、各處方における他品目との組合わせの變化を検討すべきであるが、その點についての全般的な検討は別の機會を待つ。しかし、『薑—椒—桂……』といった芳香性品目の定型的併用や、烏喙（附子）——藜蘆の強毒物併用については、各論で指摘した。

(86) 藥用専門品目は、もちろん毒物に限るわけではなく、藥作用がはっきりしているものや藥として廣範圍の處方に使われるものが多いが、上古（秦・漢よりさらに以前）には醫藥は有毒物が多かったことを、岡西爲人氏が指摘している。（同氏著『本草概説』・創元社刊・昭和五十二

(87)

年の第一章・本草の濫觴 内十一～十三頁)

のちの時代・陶弘景『神農本草經集注』よりあとの中國本草書の歴史においても、農作物品目を含めて極めて廣範圍の領域から、新品目を收録し續けていった傾向が顯著である。(拙論「歷代總合本草書におけ

る植物新入品目の考察」・山田慶兒編京都大學人文科學研究所研究報告『中國の科學と科學者』所收・昭和五十三年 において考察した。)